

# 接点問題とメカニズム説明

井上 研 (Ken INOUE)

名古屋大学情報科学研究科

本発表の目的は、Bermudez(2005)が提示した「接点問題 (interface problem)」を叩き台にして、科学的説明の一形態であるメカニズム説明が、常識心理学的概念(信念、欲求など)を説明の対象とする際に生じうる問題点について論じることである。

我々は通常、人間の心と行動についての一般的な知識を持ち、それを様々な場面で用いる。例えば、我々は社会的な世界を円滑に生きていくために、他者に信念や欲求を帰属し、その心を推測して行動を予測したり、あるいはある人の行動に説明を与えたりする。ここで用いられている知識体系は常識心理学あるいは素朴心理学と呼ばれている。他方、我々は人間の心と行動の関係について科学的に研究する、認知科学や神経科学といったいわゆる「心の科学」というもう一つの知識体系も持っている。

心の科学の発展に伴って気になってくるのは、常識心理学と心の科学との関係である。Bermudez(2005)は、我々が日常行っている常識心理学的な説明と、科学的心理学およびそれと関連する神経生物学や分子生物学における説明との関係性について説明を与えるという問題を「接点問題」と名付けた。もう少し具体的に言うと、接点問題というのは、ある人の行動に対して与えられる、信念や欲求や他の心理的状态による説明とニューロンの集まりの活動パターンによる説明とはどのように関係し合うのか、あるいは、ある人を意識を持った合理的主体として理解することと、その人の脳を複雑な計算をするコンピュータとして理解することとの関係はどんなものかなどを説明する問題である。

Bermudez(2005)によると、現在のところ接点問題に対する答え方は四つあるが、本発表ではその内の一つの立場に焦点を絞る (Bermudez(2005)では "functional mind" と名付けられている)。その立場では、まず常識心理学的説明は科学的説明と同じような因果的説明であると考え、そして常識心理学的説明が扱う信念や欲求といった心的状態を実現している高次の認知メカニズムを突き止め、それらの能力をより単純で基礎的な認知メカニズムへと機能的に分解して行く。理想的にはこの分解は分子生物学レベルまで続けられる。この立場では、常識心理学と

科学的心理学は、認知的機能とその実現者という関係によって連続的な関係を持つと考える（参考までに接点を持たないと考える立場も簡単に紹介しておく。それは常識心理学的な説明が扱う規範性や合理性という概念は、神経生物学や認知心理学のような記述的理論には還元されず、それゆえ常識心理学と科学的心理学には接点がないと考える立場である。”autonomous mind”と名付けられている）。

Bermudez(2005)は、信念や欲求といった心的状態を実現している認知メカニズムを特定する具体的なプロセスを示していない。メカニズム説明の例として記憶メカニズムを特定するプロセスが挙げられているのみである。では、信念、欲求状態を実現している認知メカニズムを特定しようと考えた際に、どのような問題が考えられるだろうか。記憶に関連している基本的な認知能力を特定できたのと同じような形で、信念、欲求に関連している基本的な認知能力を特定することは可能なのだろうか。本発表では、現在行われている科学的心理学の前提である方法論的個人主義と、常識心理学的説明の持つ社会、文化に相対的な側面にはギャップがあり、基本的な能力を特定することには困難があるということを指摘する。